TS転生したら主人公の幼馴染ポジだった上に、おっさんの女だった件～負けヒロインどころの話じゃないんだが～

あへんちんき

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エロゲ世界に転生し、ヒロインの１人で原作主人公の幼馴染の長田南志実になった俺。しかし、俺は既に、物語の黒幕に弱みを握られており、薬を打たれ、逃げられない状況にされ、黒幕の女として、屈辱的な日々を送っていた。勿論、体は許してないし、まだ、完全に黒幕の女になったわけじゃない。けど……。できれば誰か、助けてほしい。そんな願いを持ちながらも、薬漬けにされた体では、もう……。

ＴＳ娘が黒幕の命令に逆らえずに仮面をつけて姿を隠しながら悪事の手伝いをするお話。仮面を被った状態で原作主人公と対峙したりする予定。

ＮＴＲさせるつもりはありませんが、ほぼＮＴＲ状態なので、ＮＴＲタグがついています。

目　次

負けヒロインどころの話じゃないんだが ―― 1
どちらかと言えば、そう、しにたい ―― 9
その場しのぎの妨害工作 ―― 16
取り返せないのに、切望してしまう ―― 23
ビターチョコよりも苦い、オモイ ―― 30
心配されるから・・・ ―― 38

負けヒロインどころの話じゃないんだが

こんにちは。

俺の名前は、長田（おさだ）　南志実（なじみ）。
その名の通り、この世界の主人公である柊（ひいらぎ）　駿（しゅん）の幼馴染だ。

何言ってるのか分からないって？

想像力が足りないようだな、やれやれ。
せっかくだし、幼馴染で負けヒロインな南志実様が、この世界について教えてやろうぞ。

俺が転生したこの世界は、俺の元いた世界、所謂前世ではゲームの世界として存在していた。

『美少女学園列島縦断』ってゲームタイトルだ。

ちなみにエロゲーな。主人公が色んなヒロインとえちえちするタイプの。まあ、バトル要素とかもあるんだけど、まあ、気にしなくても良い。

このゲーム、エロゲーあさりマンだった前世の俺は知っていたが、普通に生きてたら知ることのないゲームだし。

で、この世界には様々なヒロインが存在している。

順番に紹介していくぞ！

まず、1人目、北海（きたうみ）　道（しるべ）。導じゃなくて道です。はい。北海道やんけ！

そう、タイトルにある通り、ヒロインの名前は日本列島がモチーフになっている。ちなみに、列島要素はここ以外にない。なんだこのゲーム。

話が逸れたが、彼女は水色の髪を持つ、生徒会長系のヒロインで、主人公と一緒に、各地で起きる事件を、生徒会として解決していくことになる。そのせいか、彼女のルートだとバトルが多かったりする。

主人公との仲ははじめから悪くなく、ただ、互いにビジネス関係的な感じだったのが、段々と進展していく様が魅力的なヒロインだ。

ちなみに最終段階まで行くと、主人公がプレゼントしたヘアピンを常につけてくれるようになる。かわいいかよ。

よし、次。ふったりめー。

本島（もとしま）　響（ひびき）。東北地方とかで分けろよゴラ。ちなみに、ここで本島が出てくるが、北海道のヒロインはさっき言った通り出てくるし、九州のヒロインも存在する。

おい、四国はどうした！　四国は！

ちなみに彼女、いや、彼はＴＳヒロインだ。は？　ＴＳヒロインは俺の枠ダルォ!?　なんでもう既にいるんだよ!!!

まあ、俗にいう親友ポジションで、こいつのせいで、俺こと南志実が人気最下位のクソゴミヒロインに格下げされる原因にもなっているんじゃないかと俺は思う。

親友か幼馴染、どっちの方がインパクトある？　そりゃ親友だろ。

まあ、本来の南志実はＴＳヒロインではないため、そこはキャラとしてかぶってないんだけども。

ちなみに髪色は黄色で、基本ボブカット。ただ、話が進むにつれて段々と髪が伸びてくるし、私服デートもズボンだったのがスカートに変わっていくんだよな。メス堕ち、してんなぁ。

ちなみに、俺はこのヒロイン、元男なんて攻略できるかか！　って、後回しにして最後に攻略を始めたんだけど、ぶっちゃけ段々メス堕ちしていくのが可愛すぎて、いつの間にか最推しになってました。はい。

ではではぁ～。さんっにんっめっ！

九州（ここのす）　美紅魅（みくみ）ちゃんでっす。

彼女はエメラルド色の髪をツインテールにしたひんぬー系メンヘラヒロインで、ちょっとでも他のヒロインに浮気するとすぐに病んでしまう。

ただ、彼女の好感度を最大まで上げると、テキストはハート塗れになり、毎日デートイベントだらけという、リア充生活を満喫できる。その分バトルは少なめだが、甘々な生活を期待するエロゲプレイヤー向けとも言える。

はい、で、よにんめー。

俺こと長田　南志実。

もう列島関係ないやんけ。

まあ、幼馴染ヒロインって感じ。

ぶっちゃけ1番攻略楽だし、主人公全肯定マシーンのため、そこまで深いエピソードがあるわけでもない。

ただ、容姿は赤髪ポニーテールで、可愛らしい見た目をしているので、一定数の人気はあるみたいだ。

まあ、一通りヒロインの説明は済んだかな。

んでまぁ、今の俺がいる世界での現状なんだけど。

主人公、俺以外のヒロイン全員好感度ＭＡＸにしてます。はい。

生徒会長である道（しるべ）は、北海道の形をしたヘアピンを身につけているし、主人公の親友である響も、完全にメス堕ちして髪型はロングになってミニスカートまで履いてる始末。

美紅魅も、他の女の攻略進めれば攻略不可になるはずなのに、なんか知らんけど主人公にベタ惚れ。

しかも、当の主人公は好かれていることに気づいてないらしい。

なんだそれ、うらやま……けしからん。

で、残る攻略ヒロインは俺だけ、なんだけど。

まあ、無理だと思う。

というか、ゲームでの南志実ならともかく、俺が南志実として暮らしているこの世界線では、攻略しない方が主人公のためになると思う。

だって俺は既に……。

「来たか、南志実君」

そこにいたのは、４０過ぎのおっさん。

この世界では、度々怪異なるものが目撃される。

そして、それに対抗する組織も、もちろん存在する。

こいつはそれのリーダーで、俺はこいつに、弱みを握られたせいで、こいつの女として生きざるを得なくなった。

まあ、呼び出されはするけど、同意なしで何かしてくることはないといえばない。

ただ、キスまでは許してしまっているのだ。現状だと。

「それで、今日はどうしたいんですか？」

「ふむ、良いものが手に入ったのでな、これを着てもらおう」

そう言って、男が取り出したのは、猫耳フードのついた、思わず着るのが恥ずかしくなるような服だ。

はぁ。変態親父が。

「これで、満足ですか……？」

「うむ、中々」

で、弱みの話に戻るとしよう。こいつの趣味に付き合ってることについては、そんなに深掘りはしたくないからな。

弱みについてだが、一応、こいつは怪異に対抗する組織のリーダー、

なんだけど。

実はこいつが、全ての怪異の元凶なんだよね。

で、それについてこそこそ嗅ぎ回っていたら、こいつにバレて、主人公こと柊駿に手を出されたくなかったら、大人しく従えってね。

ゲーム本編だと、主人公は最初は何の力も持っておらず、いろいろな怪異と出会い成長していく。だから、最初は大した力を持っていないのだ。

本来なら柊駿はこの組織のボスであるおっさんからはノーマークなため、無力でも何の問題もないんだけど、俺がおっさんの正体を知ってるってことがバレたせいで、主人公がおっさんにとって、俺に対する人質として機能することになっちゃったんだよね。

ちょっと待てよ、ヒロインの好感度ＭＡＸなら、主人公もある程度修羅場を潜ってきてるだろうし、力を持ってるんじゃないか、とそう思う奴もいるだろう。

そうなんだよ、そのはずなんだよ。

でもね、違うんだ。

駿（あいつ）、ヒロインの好感度は上げまくってる癖に、戦闘面で言えば全くと言って良いほど成長していない。

いや、何でだよ。

親友ＴＳヒロインの響とか、メンヘラヒロインの美紅魅が好感度ＭＡＸで戦闘できません、っていうならまだわかる。

でも、生徒会長である道（しるべ）は、どう足掻いたって怪異との戦いでしか

好感度を上げられないはずなんだよ。

逆にどうやって好感度上げたんだよ。

とまぁ、こんな感じで、俺はこのおっさんから逃げることができないでいる。

「ほら、手を出しなさい」

それに加えて。

「んっ、あっ、あっ、あっ」

チクリと、俺の左腕に、少しの痛みが走る。

しかし、次の瞬間には。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」

気持ち、良すぎる……。

やっぱこれ、癖になる。

やめらんねぇ!!

そう、お薬様だ!!!

この薬があるから、もう、逃げ出せないんだ！

わかってる。わかってるんだ。

この薬が、使えば使うほど人間性を失うものだってことも。

最終的には、怪異になってしまう、危ない代物だってことも。

このおっさんが、俺を女の怪異にして、最終的に好き放題しようとしてるってことも。今、手を出されないのは、最終的には好き放題できるからなんだって。

全部、わかってる。

けど、やめられないんだ。

助けてほしい、そう思うこともある。

けど、主人公はまだ弱いし。
助けてくれる存在なんて、いないんだ。

どうせ俺は、薬のためなら、どんなことでもやってしまう。

だからもう、手遅れなんだ。

どちらかと言えば、そう、しにたい

「駿も南志実も、２人揃って目にクマつけて、どうしたっていうんだよ」
「ん。まあ、夜更かししてたから」
「俺は生徒会長とちょっとやることがあったからな……」

早朝、俺達は3人で登校していた。
原作主人公こと柊　駿と、幼馴染の南志実（俺）　ＴＳ親友ヒロインこと、本島（もとじま）　響（ひびき）くんちゃんだ。

基本的に俺達は、登下校の時はこの3人なことが多い。
この関係性は、中学生の時に、３人で同じクラスになった時からずっと変わらない。

高校生に入ってからは、響が女の子になったり、駿が生徒会長と放課後に居残るようになったりしたせいで、一時期登下校を一緒にしない時期もあったりしたが、今は登校の際は3人で一緒に学校に行くことになっている。

まあ、駿は今でも生徒会長との交流はあるみたいだけど。

「ふーん。あんま夜更かしとかよくないぞ。南志実はせっかく可愛いんだしさ。お前もお前だぞ、駿。いくら生徒会長と2人っきりだからって、浮かれたらダメだからな！」
「私がかわいいのは知ってるよー」
「相変わらず自信満々なんだな……」

そりゃそうだろう。だって、ゲームのヒロインなんだし。可愛くて当然といえば当然だ。

ただ、夜更かしに関しては仕方ない。昨日はおっさんの呼び出し時間が長かったのだ。多分、今まではちょっとだけおっさんにも暴言を吐いてみたり、ちょっとした抵抗をしていたのだが、昨日はそれがなかったからだろう。

そのせいで、おっさんの機嫌をよくしてしまった。結果、いつもより長い時間おっさんのところにいることになったのだ。

にしても、響、早速生徒会長に嫉妬してるな。駿は気付いてないみたいだけど。

これは相当不安になってるだろうし、後でフォロー入れとくか。

～☆～

チャイムが鳴り響く。

現在時刻、午後１：００。昼休みの時間だ。

俺は食堂で響と一緒に昼食をとっていた。ちなみに、駿の奴は生徒会長と食事をとっているらしい。

「なぁ……。やっぱり駿って、生徒会長とできてないか…？　俺の付けいる隙なんてないと思うんだけど」

「そんなことないよ。駿って、多分今好きな子とかいないだろうし。生徒会長とも、ビジネス的な関係があるだけで、別に恋愛感情とか、そんなものないでしょ」

そして絶賛、恋愛相談中だ。

俺は、響が女の子になってから、駿のことが異性として好きになってしまったことを知っていた。

変にライバル視されて響との関係が悪化とかも嫌だったし、俺の方から、響の恋愛に協力するって約束を取り付けたのだ。

結果として、俺は響の恋愛相談役を請け負うことになった。その時、実は響は昔俺のことが好きだったとかいう衝撃の事実をついで感覚で明かされたのはまた別の話。

「生徒会長の方は絶対駿のこと意識してるだろうけど、駿は鈍感だし、多分本当に生徒会長のこと何とも思ってないと思うよ」
「えーそうかな……。でも、生徒会長以外にも、なんか緑色の髪の毛の子と仲良さそうだし……」
「あー美紅魅のこと？　それなら大丈夫だよ。美紅魅、この前『駿君が全然振り向いてくれない～』って嘆いてたから」

俺としては、響の恋愛相談役になって良かったと思う。主人公（駿）と恋愛ってのは転生した時点で人生設計（将来の夢）から外してたし、前世から俺の最推しは響だ。だから、主人公と響を結びつけることのできる立場になれたのは、本当に良かった。

それに、どうせ俺はヤク漬けにされた女だ。こんな奴が隣にいても、駿は絶対に幸せにはなれない。

「知り合いだったのか？　その美紅魅って子と」
「んー。まあ、話すようになったのは最近だけど。なんか、急に『あんたには負けないんだからー』って宣戦布告されて、そっからって感じ。多分、恋敵か何かだと思われたんだろうね。私は別に、駿のことどうとも思ってないのに」
まあ、俺だってもし好きな人と一緒に登下校してる奴がいたら、そいつは恋人なんじゃないかって思っちゃうだろうし、美紅魅が宣戦布告しにきたのも、納得といえば納得だ。

「あのさ、我慢してたりとか、ないか？　本当は駿のこと好きだけど、俺が駿のこと好きだから、手を引いてるとか……」
「え、ないけど」
「本当に？」
「うん。ていうか、そもそも私、好きな人すらいないから」
「そうか……」

響は多分、自分が元男だから、本当に駿と恋愛して良いものか、心のどこかで不安になっている部分もあるのだろう。
しかし、さっきの質問のせいで、ちょっと雰囲気が気まずくなっちゃったな……。このまま恋愛相談続けるのは無理そう。切り上げるか。

「でも実はね、好きな人はいないけど、４０過ぎのおっさんとそういう関係だったりはするよ」
「は？　え？　お前、まさかパパ活を……。や、やめとけそんなの！　もっと自分の体大事にしろ！」
「ふふ、冗談だよ」
「はぁ!?　冗談かよ……はぁ……し、心臓に悪い……」

事実なんだけどね。
にしても、本当に心配してくれてるなぁ……。

そうだね、もっと自分の体、大事にした方がいいよね。
薬なんて、使うべきじゃないよね。

わかってるんだよ、そんなこと。
でも、やめられない。やめたくないんだ。

一度アレを知ってしまったら、もう、後戻りはできない。

一回でもアレを打たれた時点で、詰みなんだ。もう、あのおっさんなしじゃ生きていけなくされるんだ。

本当は、薬なしでも生きていければ、それが1番良いんだろうけどね……。

～☆～

学校が終わり、かなりの時間が経った。今の時間は午後8時。辺りも暗くなってきていて、健全な高校生ならば家にいなければいけない時間。

そんな時間に、俺は、例のおっさんの命令を受けて、外出していた。

おっさんからの命令は一つ。

『怪異を守れ』

ただ、これだけ。というのも、最近、確かここ3日4日だっただろうか。おっさんの作り出した怪異が、立て続けに狩られてしまっているようなのだ。

まあ、十中八九主人駿公と生徒会長だろう。

今更物語が開始し始めたのだろうか、もう3人のヒロインの好感度はＭＡＸであるというのに。

まあ、いい。俺は適当に怪異を守りつつ、主人駿公達の妨害をすればいい。

勿論、原作では南志実は戦闘パートには介入してこない。そもそも戦う力がないからだ。でも、俺の場合はおっさんの薬にヤク漬けにされたせいで、ある程度戦えるようになってしまった。元々薬も、怪異にするためのものだったし。

別に、今回の怪異は特に人に害を仇なす存在というわけでもないから、守ることに特に異論はない。

でも、怪異というのは基本的に人を害する存在だ。何なら今回の怪異だって、武器を持っていなければ特に何の反応もしてこないが、相手が自分を害せる道具を持っていれば、即座に攻撃を加えるくらいには凶暴さを持ち合わせてはいる。

もし、これからも、怪異をずっと守り続ければならないのなら、主人公（駿）と、ずっと戦い続けなければいけないのなら、

俺は、耐えられるのだろうか。

怪異を守らないという選択肢はないし、主人公（駿）に対して手加減しないって手もない。だって、俺は薬が欲しいから。

ちゃんと働かないと、薬をくれないから。

俺は、変声機付きの道化師の仮面をつけて、その時を待つ。

今回守る怪異は、触手型（巨大ミミズ）怪異。

ウネウネとしていて、ちょっと気持ち悪いだけの怪異だ。こいつは、おっさんの実験の過程で生まれた怪異で、多分用途は、まあ、触手プレイとかだろう。

というのも、おっさんはかなりの変態で、怪異を生み出したのも、全部『そういうこと』のためだ。

今のところ、女性の被害者は、まあ、俺だけだろう。

でも、奴を放置しておけば、もっと多くの被害が出るだろう。

やめるなら今だ。

薬を打ってもらうことを諦めて、それで、おっさんのことを告発し

てやれば良い。

原作では最後に判明した黒幕の正体を、俺は既に知っているんだ。
今、告発すれば、主人公(駿)と生徒会長が、貴重な青春を怪異との戦いなんてものに消費せずに済む。

それどころか、主人公(駿)が失敗した時のことも、考えなくて良くなる。

でも……。

「薬、欲しい……」

無理だ。
アレなしで生きるなんて、無理。不可能だ。

助けて欲しいとか、そんな次元の話じゃない。

もう手遅れで、どうしようもない。抜け出せないんだ。

だから、もう。

怪異になって、主人公(駿)に殺される。

多分、それが1番良いんだ。
きっと、それが俺の幸せなんだ。

その場しのぎの妨害工作

「ここに、またあの時みたいな怪物がいるのか…」
「だと思うわ、目撃証言も、ここら辺らしいし」

辺りも暗くなってきた頃、夜８：００に男女２人でお出かけ。世間で言えば中には破廉恥な、学生の本分は勉強だ、とも主張されかねない。

しかし、２人は別に恋仲というわけでもなければ、体の関係があるわけでもない。片方は意識しているかもしれないが、２人の間柄は、完全にビジネス的なものであった。

怪異の退治。それが、最近の２人の日課だ。といっても、３、４日前から始まったもので、まだ日課だと呼べるほどのものではないのかもしれないが。

「上よ！」

突如、頭上からウネウネとした触手のようなものが襲いかかってくる。

２人組の片方、女の方が、異変に気づき、触手の位置を知らせる。

「了解！」

そして、女の返事を受け、男は小型の銃のようなものを取り出す。

その銃の引き金を引き……。

「グギャアァオ!!」

触手のようなものの先が、弾け飛ぶ。
と、同時に、おそらくその触手の持ち主であろうモノの鳴き声が、辺りに響く。
周りを見ると、壁や地面が、触手の赤色の血で染め上げられている。
「やっぱり、有効みたいね、その銃」
「ああ、まあ、何でこれがこいつらに効くのか、まだよく分からないんだけどな……」
『こんな夜更けに、ここに何をしにきた？』
「「!?」」

前方から、道化師の仮面をつけ、ローブのようなものを羽織った者が、2人に問いかける。声を聞いたところ、男のようだが、しかし、さっきの触手は、彼にも見えていたはずだ。それでも彼は、動揺する様子はない。

つまり……。

「あいつ、何か知ってそうね……」
「ぽいな……。もしかしたら、この怪物共の親玉かもしれない」
『質問に答えてもらいたいのだが……』

2人は、目の前の男を警戒しながら、さっきの触手がまた襲ってこないか、辺りを注視する。

『……。そうか、質問に答える気がない、か。まあ別に良い。命が惜しいなら、即刻この場から立ち去れ、さもなくば……』
「さもなくば、何だ？」
『俺はお前達を消さなければならなくなる』
「随分と好戦的みたいね……」

男は、懐からナイフのようなものを取り出す。刃先はギザギザで、切られればかなり痛そうだ。

そんな男の様子を見て、２人組の女の方は、自身のポケットから携帯を取り出し、警察に連絡を入れようとする。だが……。

「なっ、繋がらない!?」

『電子機器は予め妨害（ジャミング）しておいた。助けを求めようとしても無駄だ。それに、警察に連絡しても意味がない。どうせ記憶は改竄される』

「あんた……何者だ？」

『……お前が知る必要はない』

瞬間、２人組の視界が光に包まれる。

「な、何？　閃光弾……？」

「前が、見えない…。何だこれ……」

２人組は驚く。ローブを羽織った道化師の仮面男は、何かをしたようには見えなかったからだ。女の方は閃光弾かと呟いていたが、仮面の男の手は一切動いていなかった。

となると、時限式か、もしくは触手の方が何かを行ったのかもしれない。そう思う２人だったが……。

『その様子だと……能力のことはまだ何も知らない…どころか、まだ覚醒もしていなさそうだな……』

ブツブツと、仮面の男はつぶやく。道化師の仮面とシリアスな声色は、絶妙に合っていない。しかし、むしろ逆にそれが不気味さを演出しているような気さえしてくる。

「能力……？　何の話だ……？」

『知らないなら、いい。とりあえず、当面はお前の持っているその銃を壊せば、どうにかなるだろう』

仮面の男はそう言って、2人組の男の方へ足を運ぶ。より正確に言うならば、男の持っているその銃を狙って。

「能力だとか覚醒だとか、よく分からないことをブツブツと……でもやっぱり、何か知ってるみたいね……。駿、あの男、その銃を狙ってるみたい……。多分、その銃も何か関係して…」

『銃そのものには大きな意味はない。肝心なのは、お前がその銃を持っている、ということだ。いや、より正確に言うならば、お前がその銃を手に入れたその経緯が、か。……喋りすぎもよくないな』

言って、男は瞬時に2人組の男の方ーーー駿の背後に回る。

「なっ」

『この銃はこちらで預かっておく。いや、今この場で壊してしまおうか』

男はそう言って、駿の持っていた銃を、素手で握りつぶし、破壊する。

駿の持っていた銃は、一瞬で鉄のスクラップと化してしまっていた。

「なんだよ、それ……お前、一体……」

『これでお前達を守るものは無くなった。このままここにいれば、さっきの触手にやられることになるが……』

実際には、あの触手は武器を持っていない相手には危害を加えることはないのだが。

しかし、そんなことはこの2人組が知るはずもない。

「……っ、逃げるしか、ないか」
「貴方は、一体何者なの？　何を知っているの？」

２人は、ゆっくり後退しつつも、女の方が仮面の男へ質問を投げかける。
そして、そんな質問に、仮面の男は、どうやら律儀に答えてくれるようだ。

『何者、か。さっきの触手に、近い存在。今はそうではないが、いずれそうなる存在、そうだな、触手のことは、怪異とでも呼ぶとしよう。そう、俺はそれに近い。そして、俺の知っていることはただ一つ』
「……一つ、だけ？」
『怪異は、人に害を為す。怪異は、そこにいるだけで、周囲の人々を不幸にする。つまり、人間にとって怪異は、いてはならない存在だ』
「それに近いって、お前は……」

２人組の男の方、駿は、仮面の男に対して、少し悲しい存在なのだろうかと、そう感じる。

だって、仮面の男の口調は、まるで自分を下げるような……怪異と近しい存在となってしまうことが、嫌であると、そう主張しているような気がしたから。

それでいて、まるで、怪異のことを２人に、駿に始末してほしいと、お願いしているようにも聞き取れた。もし、自分が怪異になってしまった時のことも含めて。

しかし、そうだとしたら、さっき駿が持っていた銃を破壊したことに、どう説明をすれば良いのかわからなくなる。結局、駿には男の真意を読み取ることは出来なさそうだった。

『これ以上話すことはない。さっさと失せろ。そのうちお前とは、殺し合う関係になるだろうからな』

仮面の男はぶっきらぼうに、２人にそう告げる。

２人組は、仮面の男に言われた通りに、その場から去っていく。

『本当は、取り上げない方が良かったけど……でも、俺は、薬が欲しいから……仕方ない……仕方なかったんだ……』

そんな男のつぶやきを聞いたのは、感情のない、ただそこに存在しているだけの、醜い怪異（触手）だけだった。

～☆～

「さっきの男、一体何者なのかしら……」

先程の２人組の内の１人、女の方、北海道（きたうみしるべ）はそうつぶやく。

彼女は、近所の高校、曇坂（くもりざか）列島高等学校の生徒会長をやっており、現在は、謎の怪物、仮面の男が言うには怪異と呼ばれる、その存在を追っている。

「怪異、か……あの男、自分のこと、さっきの触手みたいな怪物に近い存在だって言ってたよな……」

「何か知ってるのはそうなんだろうけど……」

２人は、仮面の男のことを考察してみる。しかし、判断材料が少なすぎて、結論を出すことができない。

「ていうか、あの銃がなかったら、私達、怪異、だっけ、それを追うのも厳しくなってくるわ」

「素直に警察に……って、悪戯だと思われて終わるか……。困ったな」
「まあ、見なかったことにする。っていうのが1番楽だけど、ね……。でも、それは嫌なんでしょ？」
「そう、だな。単純に知的好奇心がくすぶられるってのもあるかもしれないけど、もし怪異が人に危害を加えるなら、その被害はなくしたいしな」
「ただ、現状だと動けないから、暫くは様子見、かしらね」
「……そうなるな」

結局、特に何かアイデアを生み出せたわけでもなく。
そのまま2人は、帰宅することになった。

取り返せないのに、切望してしまう

あー。あー。

はい！こんにちはこんばんは！
ＴＳ転生型幼馴染系ヒロインの長田南志実ちゃんで～す!!

はぁ……。

無理して取り繕うとしても、やっぱり落ち込んでいる時って元気でないんだな。
というのも、最近、俺と同じくＴＳヒロインな響くんちゃんから、『もしかして最近元気ない？』と、聞かれてしまったのだ。

うん、当たりです。かなり元気なくなっております。最近、薬を使う頻度が増えてきて、まあ、薬が足りなくなると不安感とか、そういう負の感情に支配されちゃうんだよね。元気がないのはそれが原因なわけだけど……。

でも、同時にそれを悟られないようにって、普段通りに振る舞ったはずなんだけどな～。

でも、響には気付かれてしまった。というのも、響は中学生時代、つまり、まだ男だった頃に、俺のことが好きだった時期があるらしい。

ただ、いつも駿と一緒にいることが多かったせいで、告白まで踏み切れなかったんだとか。
今やその恋敵である駿のことが好きになってしまっているわけだが。

しかし、これは困った。
転生する前は、本島響は、俺にとって複数いるヒロインのうち、最推しであるヒロイン。ただそれだけだったし、ましてや物語の主人公である駿も、プレイ時は自分の分身のようなもの。好きだとか嫌いだとか、そんな感情すら抱いていなかった。

しかし、響や駿は、今の俺にとって大切な存在となってしまった。
だからできれば、俺の置かれている状況に、気付かないでいてほしいと、そう思ってしまう。

もちろん、巻き込みたくないって気持ちもある。
でも、やっぱり一番大きいのは、嫌われたくないって、そういう気持ちだ。

だって、そうだろう。
実際、薬物に溺れている人間を、世間はどう評価するか。

人によって様々だが、中には、『理解できない』だとか、『怖い』だとか、『関わりたくない』だとか、そんな印象を抱くだろう。

一般的な目線で言えば、薬物中毒者は『異常者』なのだ。

世間では、白い目で見られる存在。今の俺は、それなのだ。

俺は、怖い。
駿と響、2人から、嫌われてしまうのが。あの2人との関わりが、断たれてしまうのが、怖い。

俺は、自分に自信がない。
駿と響と仲良くなれたのも、原作知識のおかげだ。

俺はただ単に、前世にやっていたゲーム、『美少女学園列島縦断』のヒロインである長田（おさだ）　南志実（なじみ）を演じていただけだ。本当の自分を、彼らに見せていたわけじゃない。俺は、自分の知っているヒロインを、演じただけ。

心の中では、『俺』って言ってるのに、口では『私』って言ってるのも、もちろん、周りの目を気にしてるっていうのもあるけど、1番は、本当の自分を曝け出して、駿と響に嫌われないか、それが不安だからだ。

あの2人は、原作での長田（おさだ）　南志実（なじみ）だから、それを演じてた偽物（俺）のことも好きになってくれたんじゃないかって。

だから、俺は……。

「何悩んでんの～？」
「別に何も悩んでないけど」
「そうかなぁ？　私が呼びかけてるのに全っ然反応しなかったじゃん」

悩んでいた俺に、1人の少女が話しかけてくる。
といっても、さっきから彼女はずっと俺と一緒にいるのだが。

今俺に話しかけてきたのは、九州（ここのす）　美紅魅（みくみ）。原作ヒロインの1人だ。
とある勘違いによって、彼女との仲が急接近した。そのせいか、最近はちょこちょこ話すくらいの仲にはなっている。

まあ、その流れも原作であっただけどさ。だから本当に、俺自信が勝ち取ったものって、何一つないんだ。きっと。

ちなみに、何故彼女と一緒にいるのかだが、今日は響が駿にアプローチするために生徒会に乗り込んでいるため、昼食を美紅魅と取ることにしたのだ。

「バレてないと思ってるのかもしれないけどさ、なじみん最近元気なさそうなのバレバレだよ？　まあ、私が人の表情とかそういうの読み取るのが上手いのもあるかもしれないけど」

「最近寝不足だったから、疲れてるってだけ。元気がないと言えばそうかもしれないけど、別に悩みがあるとかそういうわけじゃないってば」

「ふーん……」

美紅魅が疑わしそうに俺の方を見てくる。

そんなにわかりやすかったんだろうか。

いや、それもそうか。薬が足りてないと、やっぱりどうしても自分を偽るのがままならなくなる。

今までは何日かに1度、薬を打ってもらうだけで足りてたのに。

最近は、2日に1回は薬を打ってもらいに行ってる。薬がないと、正常でいられない。

何もかもが嫌になって、でも、薬を打っているときは、とても幸福で、気持ちいい。

あぁ、思い出したら、薬を打ってもらいに行きたくなってきた。

でも、我慢だ。今の状態なら、まだ我慢できる。

大丈夫。まだ耐える。昨日もらったばかりなんだから。

「ちょっと、本当に大丈夫？　なんか、辛そうな顔してるけど」

「ぜんぜん、だいじょうぶ……ちょっと、つかれたから、きょうはそうたいする」
「え？　ちょちょちょ、ええ!?」

やっぱり我慢できない。
今すぐ薬が欲しい。
薬がないと生きていけない。

薬が欲しい

薬が欲しい……

薬が、欲しい

くすりが欲しい……

くすりが……ほしい

～☆～

「よっ！　早退するんだって？　なじみんも不良か～」
「うるさい……いそいでるから」
「本当に体調悪そうじゃん。大丈夫か？　俺の家のが近いし、寄ってく？」
「黙れ」

こいつは桜庭（さくらば）　李野斗（りやと）。不良だ。髪は金髪に染め上げてるし、制服はかなり着崩しているし、女遊びが激しいとか、薬をやってるとか、そ

んな噂が絶えない男だ。

父親との仲が悪く、彼が原因で両親が離婚するまで至ったとか、そんな話もある。

「そんなこと言わないでさ。そんなしんどそうな状態で、女の子が1人で帰ったら、危ないよ？」

「お前と帰るほうが危ないっての。帰るから、どっか行って」

「人が心配してやってるんだから、それに甘えるのが常識ってもんじゃないの？」

「心配じゃなくて下心でしょ」

「そりゃ……下心がないって行ったら、嘘になるけどさ……」

こいつ、最初に出会った時、白々しく俺に対して『久しぶり』なんてほざきやがった。当然俺はこいつのことなんて知らなかったし、昔知り合いだったとか、そういう記憶もない。

多分、俺の容姿が良かったから、お近づきになりたかったんだろう。

原作には出てこなかったし、ある意味こいつとの関係は俺だけが手に入れたものではある。いや、どっちにしろ、長田（おさだ）南志実（なじみ）の容姿を気に入ったわけだし、こいつとの関係も、俺自身が勝ち取ったものではないのかもな。

まあ、普通にこいつのことは嫌いだし、気にはしてない。

チャラチャラしてるし、女遊びが激しいって噂が個人的に無理だ。俺に話しかけてくるのも、俺の容姿がいいからだろう。原作ヒロインなだけあって、容姿は整ってるからな、俺。

もしくは、こいつにとって俺は僻みの対象なのかもしれない。

俺は家庭的に恵まれてる。優しい両親に、ちょっとシスコン気味な兄だ。

ちなみに兄も原作に登場してくる。主に南志実攻略の障害として。南志実の好感度は最初からカンストしてるようなものなので、原作だと南志実√は兄をいかに納得させるかという、そういう話になっている。

これもまた、原作ヒロインの長田（おさだ）南志実（なじみ）が持っているものであって、俺が持っているものじゃない。

いや、もう考えるのはやめよう。こんな気持ちも、薬があれば消える。

全部、薬で解決できる。

だからいいんだ。

「なじみんやっぱ俺のこと嫌い？」

「嫌い」

「うわぁーショック。俺はなじみんのこと好きなんだけどなぁ～」

「うざ……急いでるから。じゃあね」

こんなやつに構ってる暇なんてない。

早く薬をもらいに行かなきゃ……。

「本当に好きなんだけどな……」

そんな彼の呟きは、薬のことで頭がいっぱいな俺には聞こえることはなかった。

ビターチョコよりも苦い、オモイ

昨日薬を打ってもらったおかげか、かなり精神的に安定してきた気がする。おかげで今もこうやって響と一緒に登校できてる。ちなみに駿は生徒会長と登校しているらしい。

はぁ。結局、我慢できなかったな。また、薬を使う間隔が縮まってしまった。

まあ、いいか。あのまま薬打たずに学校にそのままいたら、美紅魅に勘付かれそうだったし。響の前で、辛そうにしてる姿は見せたくなかったし。これで良かったんだ。きっと。

「実は俺、手作りチョコ作ってきたんだけど……」
「手作りチョコ？　なんで？」
「え？　だって今日、バレンタイン……」

俺の隣にいた響が、急に手作りチョコの話をし出したもんだから、一体なんのことやらと思っていたが、どうやら今日はバレンタインデーだったらしい。

うん。完全に薬のことしか頭になくて、忘れてたね。

「え？　もしかして用意してないのか？　チョコ」
「あーうん。ごめん、忘れてた。いつもは響と駿の分は絶対用意してたんだけどね…。うっかりしてた」
「なぁ、本当に大丈夫か？　昨日も早退したらしいし……」
「あー、そうだね。最近ちょっと体調悪かったから。でも大丈夫。もう回復したから。でも、バレンタインのチョコ用意できなかったのは、その、ごめん」

「いや、全然。体調悪かったんだし。それに、南志実にはいつも世話になってるから」

しくじったな。

俺はいつもバレンタインデーのチョコ作りは欠かさなかった。

駿と響の分は必ず作ってたし、兄の分も作ってた。

それは、本来の原作ヒロイン、長田南志実がそうしていたからだ。

「で、今は体調元に戻ってるんだっけ？」

「うん。心配かけてごめんね」

「本当、体調管理に気をつけろよ。駿も多分心配してると思うぞ」

「それは、気をつけるようにする。うん。大丈夫。これからは、こういうこと、ないようにするから」

けど、薬にとらわれすぎたせいで、完全にバレンタインのことを忘れてた。

そのせいで、響に余計な心配をかけさせてしまった。この調子だと、駿も俺のことを心配しだすだろう。

兄だってそうだ。あのシスコンなら、きっと妹からチョコを貰えなかったことに、相当ショックを受けるに違いない。なんなら、チョコを作らなかった理由を探り出しかねない。

本当にやばい。兄を巻き込むわけにはいかないし、ましてや俺が薬漬けにされているなんてことは知られてはならないのだ。

「駿、喜んでくれるかな……」

「響の手作りチョコ、結構美味しいから、駿も喜ぶと思うよ。自信持って。響って可愛いし、あの駿だって男なんだから、ちょっとアプローチすればコロっと落ちるよ」

「そ、そうかな……。そうだといいな……」

家に帰ったら、兄の対処に追われることになるな。幸い、今は薬が必要なわけじゃないから、今日一日兄の説得に費やせば……。

ピロンっ。

突然、俺のスマホから通知音が鳴る。

『今日、１９：００』

おっさんからだ。これは、呼び出しの合図。

なんでよりによって今日……。

いや、そうか。

今俺は、２日に1回の周期で薬を貰っている。

俺は昨日、薬を貰ったもんだから、てっきり今日は呼び出しがないと思っていたが、昨日は本来薬を貰う日ではなく、俺が我慢できずに先走って貰っただけなのだ。

だから、本来なら今日が、呼び出しを受けて薬を打ってもらいに行く日なんだった。

行きたくない。けど、いかなきゃいけないな。兄の説得、どうするか。

まあ、いい。とりあえず、学校に行こう。兄の説得は、後で考えればいい。

～☆～

放課後、俺はちょうど駿と廊下で出会った。そのため、少しだけ立ち話をする。

「南志実、本当に体調、大丈夫なのか？」
「うん。大丈夫。でもごめん。チョコ、渡せなくて」
「いや、それはいいんだけどな。まあ、夜更かしはほどほどにな？」
「あはは。そうだね。肌にも悪いし、今後は控えるよ」

案の定、駿の奴にも心配されてしまった。
そりゃそうだ。今まで欠かさずにチョコを渡してくれてた相手が、急にくれなくなったものだから、何かあったんじゃないかと、そう思ってしまうものだろう。
まあ、まさか薬漬けにされてるとは思わないだろうが。

「それにしても、結構貰ってるんだね。ほんm……義理チョコ、かな？　わからないけど」
「ん？　ああ。そうだな。生徒会長と、美紅魅、あと、響から。後、隣のクラスの知らない子からも何個かもらって、7個。まあ、多分全部義理なんだろうけどな」
「凄いもらってるね」
「まあな」

そう言う駿は、どこか嬉しそうに見える。
そりゃ男の子だし、女の子からチョコ貰ったら嬉しいもんだよね。
後、多分全部本命だと思うよ、そのチョコ。言わないけどさ。
少なくとも、生徒会長、美紅魅、響の分は全部本命だろう。

まあ、そんなことこの鈍感系主人公に言っても通じないんだろうけどさ。

「あ、悪い。そろそろ会長との約束があるから」
「そっか。ごめんね、足止めちゃって」
「いや、全然大丈夫。それじゃ」

駿は急ぎ足で生徒会長の元へ走っていく。
多分、怪異のことで話があるんだろう。

さて、それじゃ、帰りますか。

「なじみん、俺にもないの？」
「ない。さよなら」

ストンと、肩に手を置きながら、俺に対してそう話しかけてくる男が1人。
金髪でチャラチャラした不良、桜庭李野斗だ。

「ふーん。じゃあ一緒にチョコ買って食べようよ。せっかくのバレンタインなんだし？」
「私は帰ってやることがあるから、無理。食べたいなら1人で食べれば？」
「冷たいなぁ」

そりゃ冷たくもなる。ただでさえ嫌いなのに、今日は家に帰って兄を説得して、１９：００にはおっさんの呼び出しに応じなきゃいけない。だから、こいつと話している暇なんてないのだ。

「ちょっとだけでも嫌？」
「どうしてもって言うなら、また別の日に行ってあげるから。今日はもう勘弁して。はやく帰らないと」
「え!?　マジ!?　オッケー！　約束ね？　忘れたとか言わせないからな。よっしゃやった!!」
「うるさ。それじゃあね」

埋め合わせはまた別の日にってやつだ。別に約束していたわけ

じゃないが。
それにしても、こいつと一緒にチョコ買って食べなきゃならんのか。

まあ、いつとは言ってないし、その時のことは未来の俺が考えるだろう。
うん。気にしないでいい。

～☆～

「気に入ってくれたかな？　薬の入ったチョコレートケーキは」

今、俺はおっさんに、首輪をつけられ、四つん這いにさせられている。
俺の眼前には、まるで犬に餌やりをしているかのように、チョコレートケーキ（薬入り）の乗った皿が置かれている。

幸いなことに、兄はどうやら、仕事が忙しいようで、どちらにせよ俺が説得に行けるタイミングがなかった。そのため、おっさんの呼び出しに応じることができたわけだが。

それにしても、趣味悪すぎるだろ。まじでこいつ……。
あークソ。薬なんてなければ、こんな奴すぐに……。

「フォークとか、何か食べるものはないんですか？」
「んー？　何を言っているんだ？　口で食べればいいじゃないか」
「はい？」
「口を近づけて、そのままかぶりつけばいいじゃないかと言っているんだ。君は私の〝ペット〟のようなものだし、それくらいできるだろ

う？」

ぺっと……だと……。

「ん？　何か不安かね。ああ。もしかしてまだ教えてあげないといけないかな？　君は、私の所有物（おもちゃ）であると」

「は……？　何を……」

「躾が足りんか？　まあいい。さっさと食え」

そう言いながらおっさんは、一応俺にフォークを渡してくれた。

でも、だからと言って、俺の中に貯められたこの屈辱感が、晴らされたわけではない。

ふざけやがって……。薬さえなければ、こんな奴には……。

「反抗的な目だな……。別に私は、お前である必要はないんだ。お前と仲良くしている、本島響、だったかな？　彼女でもいいんだよ。可愛いしね。いや、むしろ彼女の方が可愛いかもしれない。そうだ、お前は代わりだよ。彼女のね。本当は彼女の方が好みだけど、仕方なくお前で我慢してやってるんだ。私は寛大だろう？　君にはもっと私に感謝をしてほしいな」

本当に…こいつは……。

屈辱を味わいながら、同時に俺は皿の上に乗ったチョコレートケーキを味わう。

あっ、こりぇ……くすりぃぃぃぃ……。

おいひぃ……おいひぃよぉぉぉぉ……。

だめ、だ、くすり……つよすぎ……。

いひきが……もつれ……かれ……。

心配されるから・・・

「くすり……しゅご……」
「ククク。気に入ってくれたかね？　今回は量を多めに入れて見たんだ。中々クるだろう？」
「もっと……もっひょ！」
「呂律が回っていないようだよ。まあいい。そうだね、私のことをご主人様、と呼びなさい。そしたら、もう少しだけ薬をおまけしてあげよう」
「お、おねがいひまひゅ！　ごひゅひんはま、おくすり、くらひゃい！」
「仕方ないね。ほら、薬だ。受け取れ」
「あ、これ、こりぇ、すき……すきぃ……」
「無様な姿を晒しおって……。最初はあんなに生意気だったのに。薬を使ってやればすぐこのザマだ」
「あ〝ー〝ー〝ー〝ー〝ー〝！　おくしゅり、いい、しゅごい……ひあわへ……」
「ふん。この調子なら、完全に私の女になるのも、そう遠くはなさそうだな……そうだな。今のうちに、ビデオも撮っておこう」
「おいひい……おくしゅりぃ……」
「お前の醜態もビデオに残しておいてやる。私から逃げられると思うなよ……南志実ぃ……」

〜??〜

「ただいまー」
「南志実、話がある」

薬を貰った次の日。
俺はいつも通り、特に寄り道することなく家に帰ってきた。

ただ、少し厄介なのが、玄関で仁王立ちしている俺の兄長田（おさだ）　西那（にしな）だ。
兄はかなりのシスコンで、妹のことになると急に勘が鋭くなるからな。警戒しておかないと。

「お兄ちゃん、どうしたの？」
「いや、響ちゃんから連絡があって。何だか最近、南志実の元気がなさそうだって」
「それは……うん。ごめんお兄ちゃん。私、ちょっとゲームがしたくて……。夜更かししてたんだよね。元気がないように見えたのは、多分寝不足で疲れてたからだと思う」
「……そう、か。女の子なんだから、あんまり夜更かしはするな」
「それじゃ、私はこれで……」
「待て、まだ話すことがある」

ほう。俺の元気がない原因については話したつもりだったが……。
どうやら兄は他に話したい内容があるらしい。

まあ、多分バレンタインのことだろう。俺はバレンタインデーは兄に欠かさず手作りチョコを作っていたからな。

ゲーム本編でも、南志実はお兄ちゃんっ子で、バレンタインデーの日には手作りチョコを作っていたってエピソードもしっかりあるし、ゲーム本編のヒロインがやっていたのだから、当然俺もやるべきだって思ったのだ。

まあ、俺自身兄のことは家族として好きだし、ゲームとか関係なく、兄にはバレンタインデーにチョコを渡してあげたいって気持ちはあったんだけどな。

「お兄ちゃん、ごめん。バレンタインのチョコ、作り忘れてて」
「いや、そのことはいいんだ。いつも作ってくれてたのに急に作ってくれなくなったのは少し……いやかなりショックだったけど、そのことではないんだ。ただ、気になることがあって」
「？」
「南志実、最近お前、帰りが遅いことが多くないか？　何やってるんだ？」

兄は心配そうな顔で南志実のことを見てくる。
この兄、シスコンだからな。帰る時間が遅いっても、普段は怪しまれないために一旦家に帰って、兄達が寝るまでは家にいるんだが。

夜中に出かけたこと、バレたんだろうか。だったら、さっき夜更かしでゲームしてたって嘘も、見抜かれていたことになる。

「いつも通り帰ってるけど」
「夜中、出かけてるだろ？」

ああ。やっぱり、バレてたんだな。
……しかし、どう誤魔化そうか。男を作っただとか、そんな嘘をついたらついたで面倒臭いし……。うーん。

「お兄ちゃんには関係ないことだよ。気にしないで」
「関係ないことはないだろ」
「お兄ちゃん、しつこい男は嫌われるよ。本当に気にしないでいいから」
「うっ、妹に反抗期が……」

突き放すかのような俺の言葉に、心を痛めてしまう兄。
これはいかん。この兄、南志実から嫌われたとなればいつ精神崩壊してもおかしくないくらいに妹を溺愛しているのだ。

実際にゲーム内で駿との恋愛を否定する兄に対して南志実が反抗的な態度をとった場合、兄が精神崩壊してバッドエンドに直行するとかいうクソゲー仕様があるくらいだ。

「えーと……別にお兄ちゃんのこと嫌いになったわけじゃないっていうか……。むしろ好きだから。ただ、その……」

「そうかそうか。お前はお兄ちゃんのこと大好きだもんな。いやー！ブラコンな妹を持つと困るなー」

そこまでは言ってないし、いくらなんでも立ち直りが早すぎる気がするが……。

しかし、俺から嫌われたわけじゃないとわかった兄は、どこか上機嫌で…。

うん。今ならさっきまでの話、なぁなぁにできるかな？

「じゃあ、私、部屋行くから」

「待て、まだ話は終わってない」

「お兄ちゃん大好き」

「そっかー。俺も大好きだぞ南志実～～～～。……って、誤魔化そうたってそうは行かないぞ」

はぁ。まあ、そうは行かないよね。どうしたものか。

「お兄ちゃん。ごめん。言いたくない」

「どうしてもか？　俺は、お前が心配なんだ。父さん達には言わないから、正直に話してほしい」

「……ごめん。本当に言いたくない。どうしても、無理。それに、言ったところでお兄ちゃんにどうこうできる話じゃないから」

ああ、そうだ。どうしようもない。
本当に、俺はなんてことをしてしまったんだろうか。
何であんなおっさんの言いなりになることになってしまったのか。
本編の長田南志実は、何不自由なく暮らしていた。
ああ、結局、中途半端な原作知識を持って俺が転生してしまったから。
だからこうなってしまったんだ。
何も知識がなければ、今頃家族と平穏に暮らす長田南志実がいたのかもしれない。
ああ、本当に、取り返しがつかない。
最初は、取り返しがつかないし、とりあえず完全な怪異になった後、主人公に殺されればそれでいいと思っていた。でも。
長田南志実は愛されている。
父親からも、母親からも。そして、兄からも。
愛情あふれる家庭で育ってきた。
虐待だとか、そんなものは一切なかったし、借金があるわけでも、片親というわけでも、とりわけ貧乏というわけでもない。
長田家は、普通な家庭なんだ。
だから、南志実が死ねば、家族は絶対に悲しむ。
兄なんて暴走してどうなることか分からない。
「どうしようもないって……。話す前から決めるなよ。俺はお前のお兄ちゃんなんだ。辛いことがあれば、話せばいい。吐き出すだけで

も、楽になるから」

南志実の辛そうな表情を読み取ったからか、兄はそう南志実に声をかけてくる。

話した方が、いいのだろうか。でも、話したところで、兄に辛い思いをさせてしまうだけになるだろう。どうすれば、いいのか。

「お兄ちゃん……実は……」

ゲームじゃ選択肢がある。

けど、ここは現実だ。そんなものはない。

セーブもできなければ、ロードだってできない。

今、ここで。

自分で考えて、それで答えを出さなきゃいけない。

話して、いいのかな。

「私は……」

でも。

「お兄ちゃん。ごめん……」

「あ、おい、南志実！」

そう言って俺は兄の横を走って通り抜け、自室に引き篭もる。

無理だ。兄に話すなんて。

『おっさんに薬漬けにされてやめられません』なんて。

そんなこと、言いたくない。
それに、言ったところで何になる？

多分、俺に薬を使わせないように努力するんだろう。
でも、一度薬漬けにされた人間は、薬なしじゃ生きていけない。

意味がないんだ。兄に言ったところで。
むしろ、薬がもらえなくなるし、兄にも嫌われてしまうかもしれないのだから、言わない方がいい。

だから、俺の選択肢は間違ってない。

きっと、今俺は、正しいルートを進んでいる。

きっと、そのはずなんだ。